世界史における旧説と誤解

厚木商業高校　小林克則

一　はじめに

歴史は、いろいろな意味で書き換えられるものだが、学会での研究が進展したため、私が高校生の頃に習った事項のなかで、教師になってから誤りとされた事項も多い。気をつけていないと、もはや「ウソ」とされていることをしたり顔で教えてしまいかねない。例えば、柳条溝事件は誤りで柳条湖事件が正しいとされたし、蘆溝橋事件は盧溝橋事件（七・七事件）と表記されるようになった。

以下は、私が折に触れて気が付いたことをまとめたものであるが、自身の「懺悔録」でもある。昔は「中国同盟会」を「中国革命同盟会」としなければ、答案に×をつけてきたが、今は「革命」をつけると×にしているのだから。これを指摘した一九八六年に発行の小島晋治他著『中国近現代史』（岩波新書）の衝撃は大きく、教科書も現在はすべて「中国同盟会」とするようになった。しかし、同書もまだ「蘆溝橋事件」と表記し、また《第一次大戦処理のための**ヴェルサイユ講和会議**は一九一九年一月に開かれ…》とある。これはもちろん現在は「パリ講和会議」である。

また、昔に覚えたことが、勝手な思い込みだったことがある。受験で日本史を選択しなかった私は、「鎌倉時代は武士の時代」と思い込んでいて、「公武の二元支配体制」ということを知ったのは、日本史を教えるようになってからであった。「鎖国」と「鎖国令」についても、一七世紀の当初からそう呼ばれていたと思い込んでいた。角川書店の『日本史辞典』（一九七六）の「鎖国」の項には「一六三九年ポルトガル船来航を禁止した鎖国令によって、最終的に鎖国が完成」とある。これしか読まないで授業をすれば、当然かもしれないが。今では、「鎖国」の語は、一八〇一年長崎の通詞で著名な蘭学者であった志筑忠雄がケンペルの『日本誌』の一章を翻訳し、「鎖国論」と題したときに始まるとされ（『平凡社大百科事典』一九八五）、二〇〇三年検定済みの三省堂『日本史B』では、注で詳細に説明し、「幕府による貿易独占などの政策を、中国の海禁政策と共通したものととらえ…**海禁体制**と呼ぶようになってきている」としているのであり、昔と様変わりである。

もう一つ「**貫頭衣**」の話をしておきたい。「衣を作ること単被（ひとえの夜具）の如く、その中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る」（魏志倭人伝、正しくは**三国志の魏書の東夷伝の倭人の条**）から、ポンチョ型の衣服をイメージしていた。しかし、武田佐知子『衣服で読み直す日本史』（朝日新聞社、一九九八）によれば、二枚の布をあわせたつなぎスカート型であったという。昨年八月の大阪大学での武田さんの講演によれば、当時の織布技術では、広い幅の布は織れなかったとのことである。

以下、教師生活の終わり近くにあたって、こだわりをまとめてご笑覧に供したい。重箱の隅をつつき、片言隻句をとりあげるが、こだわりは時代のイメージを正しく把握するための作業である。旧説と新説がせめぎあっているものもあるが、生徒に両説を示すことで歴史の奥深さに関心を持たせることもできると思う。先生方も、多くのネタをお持ちと思うので、お互いに出し合って「誤解」を解く作業を続けたいものである。

二　古代西アジア・地中海世界

（1）語族とは何か。

ある学習参考書を読んでいたら、「山岳民族の移動――印欧語族を中心に、馬と戦車を駆使してオリエント各地に侵入」という表現があったが、これは正しいといえるだろうか。

まず、語族とはなんなのか。教科書を調べてみた。「同系統の言語グループ、ないしそれらを話す人々の集団を**語族**とよぶ」（山川出版社『詳説世界史』二〇頁。二〇〇三年発行）。

「これらの諸言語は、文法上の特徴などからいくつかの集団に分けることができる。このような言語集団を**語族**という。語族は、人間集団を分類するための基準として使われることがある」（三省堂『世界史B』六頁。二〇〇三年検定済み）。

「**語族**とは、同一の祖語から派生してきたと考えられる言語のグループをいう」（帝国書院『新編高等世界史B』九頁。二〇〇三）。

帝国書院を除いて語族を「人間集団」の意味でも使っているが、それでよいのだろうか。辞典類にあたってみよう。

「言語学的にみて、一つの源となる言語から分化したと想定される言語群」（『平凡社大百科事典』）。

「family of languages（英）比較言語学において異なる言語間の類似や一致について音韻、文法、語彙に対応が認められ、親縁関係が明らかにされる場合、これらの言語は共通の祖語から派生した同系の言語とみなし、これを語族という」（角川『世界史辞典』二〇〇一年発行）。

「言語学上では、同一起源の言語から分かれて発達した言語の一群をいう。歴史学などでは、同系統の言語を話す人間集団という意味でこの語を用いることもあり、その場合には、インド・ヨーロッパ系、セム系などと表すことがある」（全国歴史教育研究協議会編『新課程用世界史B用語集』山川出版社、二〇〇四年発行）。

このあたりが妥当な表現といえようか。つまり、語族とは本来は言語学上の概念であり、これを人間集団に援用するのは歴史学者の誤用から生じたのであった。正確には、「～語族に属する言語を話す人々」と表現すべきだろう。

次に「**山岳民族の中心がインド・ヨーロッパ系民族**」というのも正しいのだろうか。少し長いが、次の論文を紹介しておく。

「高校教科書〈世界史B〉には、古代オリエントの単元でインド・ヨーロッパ語族の民族移動とその歴史的役割をことさら強調する傾向が目立つ。（中略）インド・ヨーロッパ系民族の移動や彼らによる馬と戦車の使用をことさら重視する前二千年紀の西アジアの歴史記述は、五〇年以上も前のドイツ・ナチス時代のイデオロギーにすり寄った歴史理解を反映しこそすれ（中略）、そうしたイデオロギーから解放された戦後の研究成果を踏まえたものではない。ヒッタイト語などインド・ヨーロッパ語族の言語を除けば（フリ語やカッシート語は非インド・ヨーロッパ言語）、古代西アジアにおける「インド・ヨーロッパ系民族」の活動の「証左」は基本的に神名と個々の単語だけである（中略）。とくに後者（Kammenhuber）は、ミタンニ王国の支配層がインド・ヨーロッパ系民族であったことの証拠とされたマリヤンネ（「戦士層」）――アッカド語形マリヤンヌ――インド・ヨーロッパ語起源説に重大な疑義を呈している」（『岩波講座世界歴史二　オリエント世界』月本昭男論文二六八頁、一九九八年発行）。

(2) ミケーネ文明を滅ぼしたのはだれか。

「海の民などの移動のなか、ドーリア人の南下でミケーネ文明が崩壊した」という表現は正しいだろうか。十年前の教科書をみよう。「(ミケーネ文明は) 前一〇〇〇年ごろ、ギリシア人の別の一派であるドーリア人によって破壊された」(『三省堂世界史B』平成六年文部省検定済一九頁)。

「前一二〇〇年ごろ、東地中海一帯に民族移動の波が襲った。ミケーネ文明も、この一環としてひきおこされたギリシア人(ドーリス人の第二次南下によって最終的に崩壊した」(清水書院『詳解世界史B』平成六年文部省検定済二五頁)。

しかし、中央公論社の新しい世界史シリーズや新しい岩波講座世界歴史の記述を受けて、教科書も書き換えられた。

「前一二世紀に《海の民》などの外敵の侵入を受けて、各地の王宮はつぎつぎと破壊され、ミケーネ文明は崩壊した。ミケーネ文明が滅びたあとのバルカン半島には、ギリシア人の一派であるドーリア人が南下して定住し、先住のギリシア人はエーゲ海の島々や小アジア西岸にも移住した」(三省堂『世界史B』一八頁。二〇〇三)。

「貢納王政の衰退や気候変動、外敵の侵入(この外敵が、同じころ東地中海一帯をおそった系統不明の民族《海の民》であったという説もある)など複数の原因によるものらしいが、滅亡のはっきりした事情は不明である」(山川出版社『詳説世界史』三三頁。二〇〇三)。

なお、「海の民」は、エジプトに侵攻した人々にエジプト人がつけた名であるが、彼等はギリシア本土からやってきたという説もある。ミケーネ(ミュケナイ)文明の崩壊の原因は、まだ不明といえよう。

(3) フラワフルの話

「ペルセポリスの浮き彫りにある有翼円盤は、ゾロアスター教の善の神アフラ・マズダの像である」という説明が、以前の図表などには載っていた。しかし、現在では否定されている。

「一九世紀以来、これはペルシア人の神であるアフラ・マズダーを描いていると解釈するものが多かった。しかし、アケメネス朝の史料には、この図像がアフラ・マズダーであることを示すようなものは一切ない。(中略)(現在の)ゾロアスター教徒は、先祖の霊であるフラワフルと呼ぶことが多い。ヘロドトスがペルシア人は寺院も建てず神像ももたないといっていることからしても、アケメネス朝初期にアフラ・マズダーの姿が描かれたとは考えにくい」

(山本由美子他著『世界の歴史四、オリエント世界の発展』中央公論社、一九八七年発行一四二頁〜一四三頁)。

なお、ゾロアスター教の成立はいつ頃だろうか。今までの説は、「前七世紀頃」(『山川世界史小辞典改訂新版』二〇〇四年発行)であった。最近は、より古いとする説が有力である。「年代不詳(前二千年紀後半説から、前七、六世紀説まである)」(角川『世界史辞典』二〇〇一年発行)や、「前一二〇〇〜一〇〇〇」(中央公論社、前掲書三六二頁)とする説がある。

(4) 古代ギリシアの騎兵について

「貴族が平民に対して軍事的優位をもっていたのは、彼等が騎兵だったから」という記述をまだ散見するが、それはかなり以前に否定されている。古代ギリシアでは鐙がまだ発明されていなかったから、自由にのりこなし、馬上から敵を攻撃することは不可能だった。重装歩兵軍は当初は平民の軍隊ではなく貴族が中心で、貴族は馬に

のって戦場におもむき、そこで従者に手綱をあずけて重装歩兵として戦ったのである（伊藤貞夫『世界の歴史二』講談社、一九七六）。

（5）表記の問題

英語表記そのままの時代は過ぎて、現地の表記、その時代の発音に従う傾向が見られるようになってきた。どこまで慣用に従うのかが難しいところだが、最近の表記の例をあげてみよう。

「ハカーマニシュ朝。ダーラヤワウ一世。パールサ。」

（『岩波講座世界歴史二』川瀬豊子論文三〇一頁、一九九八年）

ここでは英語風表記（アケメネス朝、ダリウス一世）はおろか、古代ギリシア語風表記（アカイメネス朝、ダレイオス一世、ペルシア）も使っていない。これからは、この方向が強まると思われる。

（6）アタナシウス派と三位一体説の話

「（三位一体説は）アタナシウスが主張し、ニケーア宗教会議で正統教義となる」という表現が散見されるが、アタナシウスが三位一体説を唱えたのだろうか。詳しくみてみよう。

「（ニケア教会会議では）ニケア信条が採択され、父なる神と子なるキリストの同質を確認し、類似本質を主張するアリウスを追放に処した」。（前掲山川小辞典）

「神から遣わされて自らも神であるキリストが地上を去った後、罪や死や律法から人類を救い、信者に信仰と心の平和を与えるのは、聖霊という形で信者の心に宿るキリストであると考えられた。（中略）（聖霊をめぐる）この紛糾を最終的に解決したのが、テオドシウス帝によって三八一年に召集された第一コンスタンティノープル公会議であった。この会議によって、聖霊の神性は認められ、神は自らを同時に、父と子と聖霊なる三つの位格（ペルソナ）の中に示す一つの神と宣言された」。（今野国雄他著『キリスト教史Ⅰ』山川出版社一九七七年発行一九九頁）

これらから、最近の教科書では次のように書いている。

「アタナシウスの説はのちに三位一体説に発展した」（前掲三省堂教科書）。「アタナシウスの説はのち三位一体説として確立され、正統教義の根本となった」（前掲山川『詳説世界史B』）。

三　南アジア・東南アジア世界

（1）小乗仏教と上座部仏教の話

「小乗仏教＝上座部（上座）仏教＝南伝仏教」とする表現が用語集などでみられる。イコールでつないでよいのだろうか。

「アショーカ王の時代までに仏教教団がインド各地に進出、定着しつつあったことはすでに述べた。（中略）部派分裂がおこったのちも上座部系の分別部は強力で、この系統の仏教がこの時代前後より遠くセイロンにまで教線を伸ばして南方上座部という部派として定着し、現在の南方仏教の基礎を築いている。彼らが西インド方言をもとにして作った聖典語がパーリ語であり、南方上座部はパーリ語の文献群を伝承している」（奈良康明著『仏教史Ⅰ』山川出版社一九七九年発行一七八頁）。

「小乗」は大乗仏教側が、それまでの部派仏教全体を貶めた表現である。そして部派仏教のうち上座部の分別部が南伝仏教となる。北伝した上座部（説一切有部）もあったので、「小乗仏教＝上座部仏教＝南伝仏教」のように、イコールでつなぐわけにはいかない。つまり、上座部仏教は小乗仏教（部派仏教）の一部であり、南伝仏教は上座部仏教の一部にすぎないのである。

（2）モンゴルの侵入とタイ人王朝の建国の関係について

「一三世紀、モンゴルの雲南（大理国）侵入により南下したタイ族が、チャオプラヤ川中流域にスコータイ朝を建国した」という表現は正しいのだろうか。最近の論文をみてみよう。

「元朝の雲南征服によりタイ族が大量に南下しモン人・クメール人を一挙に排除したという見方はもはや成り立たない。元冠のインパクトをセデス（フランスの東南アジア史家）が過大評価してきたことが、大きな問題である」（岩波講座『東南アジア史二』二〇〇一年一八頁。石澤良昭論文）。

（3）スコータイ朝とアユタヤ朝の関係について

「スコータイ朝を滅ぼしてアユタヤ朝が建国された」という誤解を私もしていた。実は、両者の併存期間も長かったのである。スコータイ朝がアユタヤ朝に併合されたのは一四三八年である。また、アユタヤ朝の成立年代は一三五〇年ではなく**一三五一年**であった。

（4）パガン朝の滅亡について

「（パガン朝）一〇四四～一二八七。一三世紀末に元の侵入を受け滅亡した」というのは、正しいのだろうか。総会の講演をしてくださった大阪大学の桃木至朗先生の『歴史的世界としての東南アジア』（山川世界史リブレット）にも、パガン朝の滅亡は一二八七年とあったのでお尋ねしたら、「滅亡年代は不明とすべきでしたね」とのこと。

「パガンは（元からの入貢・臣従の）要求を拒絶したため一二七七年から八七年までの十年間に四回も元の征討を被るはめとなった。結局、パガンの王権は元に隷属することによってかろうじてその存続を認められたが、政治の実権は東部山地から進出してきた新興勢力のシャン族の手に奪われ、**九九年**に王朝は廃絶され消滅した」（前掲、平凡社百科事典）。

岩波前掲書の大野徹論文『パガンの歴史』や、石井米雄他編『世界各国史五　東南アジア史①』（山川出版社一九九九年、伊東利勝論文）でも、一二八七年に元によって滅亡したとは書いていない。シャン族つまりタイ人により実権が奪われたとしている。

（5）プラッシーの戦いについて

「イギリス東インド会社は、ベンガル太守と結んだフランスをプラッシーの戦いで撃破し、フランス勢力をインドから駆逐した」という表現がよくみられるが、戦いの実像はどうだったのだろうか。

実は、フランス人の砲兵隊が砲撃に参加はしたものの、砲撃戦を終えてイギリス軍の小部隊が突撃すると、ベンガル太守軍は潰走した。イギリスと密約を結んでいた前太守の義理の兄は全く動かなかった。「要するにプラッシーの戦いは、一応戦闘という形式はとったものの、そこには武勇のかけらも見出だすことのできない戦いであった。その実態は宮廷クーデタだったというべきであろう」（中里成章他者『世界の歴史一四』中央公論社）。

イギリスとフランスの対立ばかりをみていると、インド人内部の抗争の理解が不十分になるようである。また、争奪が繰り返されたのち、フランスは、シャンデルナゴルとポンディシェリを一九五四年まで保持した。フランス勢力はインドから駆逐されてはいない。

（6）インドのカースト制について

「四つのヴァルナが複雑化して多くのジャーティが形成された」という理解については、以前に講演をいただいた東京外語大学の粟屋利江先生の『イギリス支配とインド社会』（山川世界史リブレッ

ト）の次の文章を紹介しておきたい。イギリス支配のもとでの宗教とカーストの再生産について述べたあと、「イギリス支配がなかったならば、今日の《カースト》《宗教》状況はなかったろうというのではない。しかし、今日われわれの目の前で展開される《カースト》的《宗教》的な諸現象を、インド古来からの《遺制》、《残留物》と短絡的にとらえるのではなく、ごく近い過去…《近代》…に再構成され、また今現在も再構成されつつあるなにものかである、という認識が求められているのである」

四　東アジア世界

（1）「外戚」とは何か

国語辞典では、「母方の親類」（広辞苑、日本国語大辞典）とあり、父方の親戚は「内戚」という。配偶者の血族は「姻族」または「姻戚」という。

しかし、諸橋轍次の大漢和字典では、「皇后の身うち。また母方の身うち」とあり、姻族と外戚をごっちゃにしている。このルーツをたどってみたら、なんと中国にあった。『史記』に「外戚世家」があり、『漢書』には「外戚伝」があって、皇后や夫人およびその一族のことが詳しく述べられているのである。現代日本の用法との違いを押さえておく必要がある。

（2）「蘇湖（江浙）熟すれば天下足る」について

このことわざは、「一〇世紀前後から太湖・長江下流域のデルタ地帯が米作の中心となり、中国経済・国家財政の重要地となったことを示す言葉」（実教）とされるが、この言葉を批判なしに使用してよいのだろうか。いわゆる「高谷ショック」を紹介しておく。

「こうした通説的理解に対して最初に疑問を投げかけたのは、（中略）高谷好一であった。（中略）圩田における堤は自然堤防にすぎず、囲田地帯のクリークは水利のためではなく漕運のためのものではないか、と批判したのである。つまり高谷によれば、圩田や囲田における稲作は従来のイメージと違ってかなり粗放的なものであったということになるわけである。高谷はさらに、宋代の稲作の先進地帯はデルタ地域ではなく、多くの支流が山間部から流れでる所に形成される支谷平野地域ではなかったかとの見解を表明している。（中略）以上紹介した近年の研究によると、華北の畑作から江南の稲作への中国農業の重心の移動という大枠は動かないものの、江南稲作の発展は二つの段階をへたと見るほうがよいようである。つまり、末代の支谷平野を中心とする稲作の段階と、明代以降のデルタを中心とする稲作の段階である」（『アジアから考える［六］長期社会変動』東京大学出版会宮嶋博史論文「東アジア小農社会の形成」一九九四）。

（3）両税法と一条鞭法について

「唐以来の両税法が廃止され、新しい税法として、明代に一条鞭法が施行された」という理解でよいのだろうか。

「（両税法は）金元以後、時代によって田賦課徴の方法は改革変遷があり、両税の名もしだいに用いられなくなったが、田畝に応じて夏秋に両徴する基本線だけは動かず、その意味で長く中国の税法に影響を残したものといえる」「（一条鞭法は）従来個別的に割当て、徴収されていた賦・役を一括して合併徴収しようとしたもので、いわば徴税技術面における改革にほかならない」（平凡社『アジア歴史事典』一九七四年初版第六刷）。つまり、両税法は廃止されたの

ではなく、徴税技術の改革が一条鞭法だったのである。

（4）「満州（満洲）」という名称について

ヌルハチが傾倒していた文殊信仰にちなんで女真族から改称したもので、本来は民族名であった。角川『世界史辞典』では、「満洲」の項に《民族》《地名》の両者がある。《地名》の項の後半には「一九世紀に入ってヨーロッパ人が東北地方北部をManchuriaとよぶようになり日本にも伝わった。清末以降東北地方全体をさす呼称として、列強により使われるようになったが、中国人は東三省あるいは東北とよんだ」とある。日本人が、無反省に「満州地方」などと使うと、「摩擦」の原因になりかねない。

（5）「長江＝揚子江」なのだろうか

地理を久し振りに担当して、現在の地図帳にも「長江（揚子江）」のように表記されていることに気付いた。長江の別名が揚子江なのだろうか。『コンサイス地名辞典外国編』（三省堂、一九七七）の「揚子江」の項によると「揚子江の名は、河口に近い揚州付近の局地的名称であったものをヨーロッパ人が全体の名称として呼ぶようになり、明治以後の日本にもこれが慣用されるに至ったものといわれる」とある。ある中国人にきいたら、「長江を揚子江なんて言わないよ」とのことであった。地名は慣用が原則のようだが、そろそろ慣用を変えるべき時期ではないだろうか。

五　イスラーム世界

（1）「フスタート＝カイロ」について。

「カイロは六四二年にミスルのフスタートとして建設された」という記述をみかけるが、フスタートは、現在廃墟となっている遺跡にすぎない。

（2）オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』について

一九世紀なかば、フィッツジェラルドの英訳で有名になったが、最近の説ではいろいろあるようだ。

「原典の『ルバイヤート』については諸説があり、他の詩人の品が混入しているということを指摘する研究者もあって確定が難しく、現在でも決着をみていない。」（角川辞典）

「今ではこの作品はアンソロジーであってオマルが書いた詩はほとんど、あるいはまったく入っていないとされている。」（岩波・ケンブリッジ『世界人名辞典』岩波書店、一九九七）

（3）アリババとアラジンの物語について

今年のセンター試験を見て思い出したのでひとこと。

「（千夜一夜物語は）一八世紀初め、フランスのガランが初めてヨーロッパに紹介して以来、世界文学の名作の一つとなった。ガランはアラジンやアリ・ババど**アラビア語原典にない話も加えたが**、日本ではこれらが最も知られるところとなった。」（平凡社大百科事典、前嶋信次による）

（4）サファヴィー朝の性格について

「サファヴィー朝は、ササン朝滅亡以来八五〇年ぶりに現れたインの民族王朝である」と教えてきたものだった。『岩波講座世界史一四』三六〜三七頁羽田正論文を読むと、それが誤解だったことがわかる。サファヴィー朝の君主はシャーを名乗ったが、ムハンマド一族の子孫と自称していた。支配層も初めはトルコ系遊牧部族で、とても「イランの民族王朝」とはいえない。まさしく「多民族国家」だったのである。

（5）レバントの海戦の意義について

以前は、この敗戦からオスマン帝国の衰退が始まったといわれたものだ。しかし、「この敗北はオスマン側にとって、西欧側が想像したほど深刻なものではなかった。（中略）**わずか五か月で艦隊を再建した**という。むしろレパントの海戦は、海軍史を語るうえで別の重要性をもつ。それは、ガレー船時代の終わりとカリヨン（三本マストの大型軍艦。六〇～一〇〇門の砲を搭載していた）を主力とする**帆船時代の幕開けを告げるものだったのである**。」（小松香織『オスマン帝国の近代と海軍』山川出版社、二〇〇四）

（6）「イスタンブル」と呼ぶようになったのはいつからだろうか

「コンスタンティノープル征服後も、オスマン帝国では《コスタンティニーエ》という名称が二〇世紀にいたるまで用いられた。**征服後にイスタンブルに改称したという事実はないが**、研究上は便宜的にオスマン時代以後をイスタンブルと呼ぶことが定着している。（林佳世子『オスマン帝国の時代』山川出版社、一九九七）

（7）「青年トルコ（党）」という組織の実態はなにか

「青年トルコ（党）＝《統一と進歩委員会》を中核とする」とか、「統一と進歩委員会＝青年トルコの正式名称」のようにいわれるが、実態はどうだったろうか。永田雄三編『世界各国史九、西アジア史Ⅱ、イラン・トルコ』によると、「青年トルコ人」という呼称は「統一と進歩委員会」のメンバーに限らず、オスマン帝国において反専制運動をしていたすべての人をさす総称であった。一九〇二年パリで第一回「青年トルコ人」会議が開催されている。一九〇八年の「サロニカ革命」は、「統一と進歩委員会」の中心をなした陸軍士官学校出の青年将校によって実現されたもので、国内外で活動していた「青年トルコ人」の多くはこれに関与する余地がなかったといわれる。

六　ヨーロッパ世界（中世）

（1）「吟遊詩人」について

「吟遊」という言葉から、各地をめぐるイメージがあるが、平凡社大百科事典によると、「《吟遊詩人》の訳があてられた中世フランスのトルバドゥールは、放浪の抒情詩人ではなく、創作を本領とする詩人兼作曲家であり宮廷芸術家である。作品を持ち歩き演奏した旅芸人は、ジョングルールと呼ばれた」とのことである。

（2）カルマル同盟の立役者マルグレーテの地位について

「女王」とした本がめだつが、彼女は即位していない。

「（前略）一三七五年の父王ヴァルデマー四世の死後、政治的手腕を発揮、翌年一人息子をデンマーク王位（オールフ三世）に、さらに夫のノルウェー王ホーコン六世の死後、ノルウェー王位（オーラヴ四世）に即け、両国の摂政となる。八七年オールフの急死後、姉の孫エーリク・ア・ポンメルンを養子に迎え、九六年までに北欧三国個別の王とした。そして翌年連合王の地位に即かせ、北ドイツ諸侯やハンザ同盟に対抗するカルマル連合を実現し、死に至るまで実権を握った。」（角川辞典）。実質的な女王ではあった。

七　ヨーロッパ世界（近世）

（1）価格革命の原因について

「アメリカからの銀の流入のため」というのが定説であって、私もそのようにおしえてきたが、もはや駄目のようである。

「アメリカの経済学者E．J．ハミルトンは、一九二九年にこの仮

説を立証する論文を発表した。ハミルトンのテーゼとともに、《価格革命》という言葉はアメリカが一六世紀のヨーロッパに及ぼした経済的な影響をあらわすキーワードとしてすっかり有名になった。（中略）ハミルトンのテーゼは、今日では支持されていない。かりに対象をスペインに限定しても、流入した銀の量と、スペイン国内の物価指数とのあいだに、相関関係が見られないからである。（中略）アメリカの銀の流入が《犯人》でないとしたら、一六世紀の長期的なインフレの真犯人は何なのか。近年の人口史の研究が、この犯人探しに光を与えてくれた。一六世紀のヨーロッパは、**急激な人口増加**の時代であり、ロシアを除くヨーロッパ全体で、ほぼ二倍の八五〇〇万になったと推定されている。」（大久保桂子『世界の歴史一七、ヨーロッパ近世の開花』中央公論社）

「（前略）メキシコ、ペルーからの銀の流入が一因とされるが、土地と食料が特に激しく騰貴した事実から、この時代の**急激な人口増加**がより重要な原因といえる。」（角川辞典）

「アメリカ大陸における銀山は一五四五年にポトシ、四六～四八年にメキシコで発見され、本格的に発掘されてヨーロッパに供給されるのは一五六〇年以降であった。（中略）一五四五年ないし六〇年よりも以前からヨーロッパの（小麦）価格は確実に上昇していた。つまり、一六世紀後半のアメリカ銀の流入は価格革命の原因ではなく、すでに明らかになっていたヨーロッパ全般のインフレーション傾向をさらに継続し補強したのである。」（『岩波講座世界歴史一六、主権国家と啓蒙』近藤和彦論文）

（2）ゴイセンは「カルヴァン派新教徒」としてよいのだろうか

そもそも「ゴイセン」という表記は、オランダ語のヘーゼンのドイツ風の誤った読み方（ドイツ語ならゴイゼンとなる）なのだそうである。もちろん、語源は乞食であり、カルヴァン派をさしてはおらず、オラニエ公ウィレムが本当に改革派だったかもはっきりしていないとのことである。（森田安一編『新版世界各国史一四、スイス・ベネルクス史』山川出版社　二四三頁、二四八頁）

（3）「アルマダの海戦の敗北でスペインの制海権は失われた」といってよいのだろうか

「《無敵艦隊》の名は後世イギリス人が付けたもので、当のスペインでは単に《大艦隊》と呼ばれた。（中略）従来、《大艦隊》の敗北はただちに両国海軍の地位の逆転をもたらしたとされてきたが、実際にはフェリペは二年間で海軍を再建・補強し、その結果、海戦後四〇年間はスペインの大西洋支配は不動だった」（平凡社大百科事典）

（4）ナントの「勅令」という訳語について

アンリ四世もルイ一四世も「王」であり、皇帝と王は、中国でも西洋でも峻別されているのだから、「王令」とすべきである。最近ようやく「王令」が使われるようになってきた。ルイ一四世のいわゆる「朕は国家なり」という訳語もおかしい。

（5）「それでも地球は動く」について

「《それでも地球は回っている》と審問所で彼がつぶやいたという記録はなくて、一八世紀のフランスの作家トレルが広めた虚構なんだけど、どんな強権によっても人の頭や心の中まで支配できないということの例えとして事実以上のリアリティーがある。」（米原万里、二〇〇五年八月二三日毎日新聞夕刊）

（6）英蘭戦争の勝敗について

「イギリスの勝利に終わり、海上覇権はイギリスに移った」とい

われてきたが本当なのだろうか。

第一次英蘭戦争では、イギリスが軍事的には押し気味だった。第二次英蘭戦争では、イギリスは緒戦を有利に戦ったが、オランダは後半巻き返し、北アメリカの植民地は放棄したものの、「自由貿易、自由航行」の原則を認めさせた。第三次英蘭戦争では、オランダはルイ一四世と結んだイギリス海軍に圧勝し、イギリスはオランダと単独講和した。（山川前掲書『各国史一四』参照）

というわけで、少なくとも「イギリスの勝利に終わった」とはいえない。では、オランダが衰退し、イギリスにとってかわられた原因はなんだったろうか。前掲書によれば、名誉革命によって同君連合になったことが、オランダには実は不利に影響したとのことである。

（7）ハプスブルク家のマリア・テレジアの地位について

彼女は、デンマークのマルグレーテを思い出させるが、「ハプスブルク家の領土」は継承し、オーストリア女大公、ハンガリー女王ベーメン女王でもあった。一七四五年、夫のフランツが、その死後は息子のヨーゼフが皇帝に即位した。彼女も「実質的女帝」であった。

八　ヨーロッパ世界（近代）

（1）「サンキュロット」の名称はいつからか

「一七九二年以降に、まずパリ民衆を指すものとして用いられ始め、やがて他の都市でも用いられるようになったが、他の都市ではパリにおけるほどには一般化しなかった」（平凡社大百科事典）

（2）イギリス産業革命の性格について。

イギリス産業革命は、「自生的」に行われたのだろうか。またイギリスの歴史家たちのなかには、「産業革命」そのものへの疑問を呈している人も多いようである。「市民革命」と同じく、再検討の必要がある歴史用語の一つとなっている。

（3）「一般工場法」の制定に尽力した人物は誰か

ロバート・オーウェンが制定に尽力したのは、一八一九年の工場法であり、一八三三年の一般工場法はシャフツベリー卿の尽力による。

（4）フェビアン協会の「創設者」は誰か

バーナード・ショーやウェッブ夫妻が協会に加わったのは、無名の若者たちが創設したあとであった。

九　現代の世界

（1）イースター蜂起とシン・フェイン党について

シン・フェイン党は組織的にはイースター蜂起を支援していない。ただ、のちにその精神を受け継ぐとして党勢を拡大した。

（2）「スペイン市民戦争」という訳について

先日のＮＨＫ「新日曜美術館」でダリをとりあげたなかで使っていた。civil warは、「内戦、内乱」である。

では、《The Civil war》を日本では何と訳しているだろうか。

（3）「長征」の到達地はどこか。

「（前略）陝西省北部の根拠地をめざし、十月に陝北の**呉起鎮**に到着した。のち、延安を党中央の所在地とし（後略）」（狭間直樹『世界の歴史二七、自立へ向かうアジア』中央公論社）

（4）「八・一宣言」を出したのは誰か

中国共産党には違いないが、「長征途中の毛沢東」ではない。

現代史には、ソ連崩壊にともなって明らかになった事実があふれている。これからもフォローする必要がある。